

書評

SOCIALIST THOUGHT

The Forerunners 1789—1850

by G. D. H. Cole

London, Macmillan & Co., 1953.

本書はコールが社会主義思想の一般史をシリーズの形で発表してゆく、その第一巻であるから、全体の完成を待つてからでなくては全般的な批評はできないわけであるが、コール自身も述べているように、本書二冊もそれ自身で完結したものとみられたいとのことであるので、紹介的な意味で本書の出現に注目したいと思う。

コールのいま意図しているところでは、第一巻でフランス革命を出発点として十九世紀前半における社会主義思想を取扱い、第二巻では十九世紀後半における発展を叙述する予定であり、第三巻以降には現世紀の問題と取組むことになっているが、これがおそらく一巻でおわるとは予想されないで、

SOCIALIST THOUGHT

少くとも二冊にはならざるをえないだろうとのことで、つまり前後四巻にはなると予期される大著作となり、コールのよいうな、驚嘆にあたいする「筆の早い」作家にとっても、おそらくそのライフ・ワークになるものと期待される。

今度発表された第一巻はその傍題として、『先駆者たち、一七八九年から一八五〇年まで』とあるとおり、フランス革命におけるグラックス・バブーフの「叛乱理論」から出発して大体一八四八年のヨーロッパにおける革命運動の崩壊を以て終っている。思想的にはその期間の最後の、そして頂点を形づくるものとしてマルクスの「共産党宣言」が取上げられている。その間にフランスではバブーフからブルドンにいたる社会主義思想の発展、ドイツではフイヒテや青年ヘーゲル派からマルクス、エンゲルスの思想の初期の展開が述べられイギリスではベイン、ゴドウィンからロバート・オーエンを経て反リカド派の経済学者たちまでにおよんでいる。著者が特に断っているように、ロシアにおける十九世紀前半の社会主義思想家たち、ペステル、ペリンスキー、ヘルツェン、バクーニンなどはわざと本書からは除外されているが、これはこれらの人々の多くが思想的には十九世紀後半にいたって、ヨーロッパの舞台に大きな役割を演じているところから、その記述を第二巻にゆずったものであるという。本書の叙述の方法が、社会主義運動の発展そのものではなくして、

SOCIALIST THOUGHT

それを背景とした、またそれに大きな影響をあたえたところの個々の思想家のイデオの発展を中心として描くものであるからは、厳密な意味での時代区分ができかねることは、容易にうなづけることであろう。ブランキやブルドンの活動が一八五〇年という一応の限界を年代的にすっとはみだしていることなどもその著しい例の一つである。

ここでまず、本書の意図するところが社会主義思想の歴史であることを指摘しておかなくてはなるまい。一般に人類解放をめざす思想を社会思想と解するとすれば、社会主義思想は二十世紀においてこそその主流となつているとみられるものの、それ以前については、ただいくつかの社会思想のうちの有力な一つであるにすぎない。いわば現代的課題のゆえに、社会主義思想史が社会思想史のなかで比類なき地位をしめるといえるのである。それとともにまた、コールが明らかにしているように、本書は社会主義史ではなくして、単に社会主義思想史である。ということとは、社会主義運動の全面的な発展史などというものはコールのような巨人をもつてしても、個人的に企てられるものではないのであって、このことは著者みずからよく知るところなのである。

次に、本書において「社会主義」とはどういう定義をうけているだろうか。コールによると、社会主義という言葉は一八〇三年にイタリア語で初めて表現されたそうだが、その語

の意味はその後におけるこの用語の意味とはまったく関連がなかった。その後、一八二七年にいたって、オーエン主義者の「コオペラチヴ・マガジン」において「社会主義者」という言葉がオーエンの協同組合論の信奉者たちに対して用いられたし、フランスでは一八三二年に雑誌「ル・グロープ」に「社会主義」という言葉が初めて用いられ、その意味はサン・シモン理論と同じであったといわれる。おもえば「社会主義」や「社会主義者」は十九世紀における新語であつたわけである。その後、この言葉がどのように複雑多岐な、人それぞれによつて内容を異にする意味に用いられたかは、周知のとおりである。そのうえに「共產主義」「共產主義者」という言葉が加わる。コールは、本書においては、社会主義という言葉をもその最もおおまかな、ひろい意味に用い、あえてそれにこまかな限定をあたえたようとはしていないようである、これは社会主義を理論づけることでなくて、社会主義思想史を描きだそうとすることが本書の意図であるのだから、当然のことといえるだろう、

コールが述べるところでは、この書につづく第二巻はロシアにおける先駆者たちを取上げるほか、各国の社会民主党の登場にいたるマルクス主義の発展、第一インタナショナル、パリ・コミューン、マルクス主義者、アナキスト等の分裂、基督教社会主義の発展、ドイツの講壇社会主義などを取扱つ

ており、すでに半ば稿をおわっているという。その刊行の一日も早いことを願うのは社会思想の研究にたずさわる一学徒のみにとどまらないであろう。（伊達宗雄）